

平成26年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	専修大学大学院・文学研究科	職名	博士後期課程学生	助成金額	500,000 円
氏名	勝田 浩令	メール アドレス			

研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）

イングランド中西部の方言研究

助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）

1. 背景

イングランド中西部のウェストミッドランズ州には、バーミンガムとブラックカントリーという二つの地域が隣り合って位置しており、それぞれの地域で話される方言はバーミンガム方言とブラックカントリー方言という別々の方言として区別されている。しかしながら、イングランド中西部を対象とした方言研究は非常に少なく、二つの方言の音声的な違いはほとんど研究されていない。また、数少ない先行研究はどれも聴覚印象に基づいて記述されており、調査者の知る限り、音響分析を利用した研究は行われていない。本調査は二つの方言の差異や類似を、方言話者の社会的要素（性別、年齢、社会階級など）との関連から明らかにすることを目的としている。

2. 調査の概要

バーミンガムとブラックカントリーの両地域で平成26年8月下旬の10日間、方言調査（音声収録）を行った。公園や大学、図書館などで地元住民を探し、被験者として適切だと判断した方々に録音への協力を依頼した。録音にはICレコーダー（Roland R-05）を使用し、被験者の方々に、調査者が用意した語彙リストを音読して頂いた。また録音後には、被験者の社会的背景に関するアンケート用紙に記入して頂いた。被験者一人につき、謝金として10ポンド（約2,000円）をお支払いした。

バーミンガムのアストン大学での調査中、幸運にも、アストン大学職員の方々にご助力を頂くことができた。職員の方々に調査協力者を募集して頂き、録音のための会議室まで用意して頂いた（写真1）。ブラックカントリー地域では、その中心地と考えられているダドリー（写真2）で調査を行った。地元の人々の温かい協力のもと、計32名（バーミンガム方言話者15名、ブラックカントリー方言話者17名）の音声データを得ることができた。

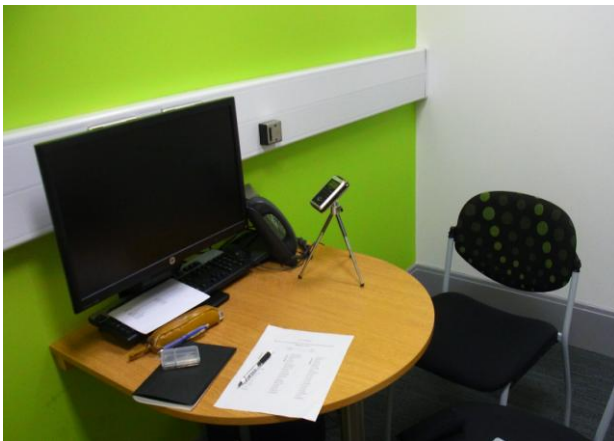


写真1 アストン大学の会議室



写真2 ダドリー

3. 調査結果

帰国後、録音データの音響分析を行った。母音のフォルマント周波数を計測し、標準化（Sトランスフォーム）を行った上で母音空間図を作成した。結果として、二重母音の発音に興味深い発見があった。それぞれの方言の特定の二重母音にお

いて、第一要素の音価が年齢に応じて変化していることが明らかになった。

図1はFACE母音のF1と年齢の関係を方言別にプロットしたものである。バーミンガム方言では年齢が若くなるにつれてF1の数値が低くなっている。一方で、ブラックカントリー方言では年齢に応じた変化は見られない。F1は母音調音時の舌の高さと反比例するため、バーミンガム方言では年齢に応じて上げ (raising) の変化が生じていることがわかる。図2はFACE母音のF2と年齢の関係を示したものである。バーミンガム方言では年齢が若くなるにつれてF2の数値が高くなっているが、ブラックカントリー方言ではそのような変化は見られない。F2は舌のどの部分が相対的に高いかを示していて、母音が前舌寄りであるほど数値が高くなることがわかっている。したがって、バーミンガム方言では前舌化 (fronting) が生じていることがわかる。

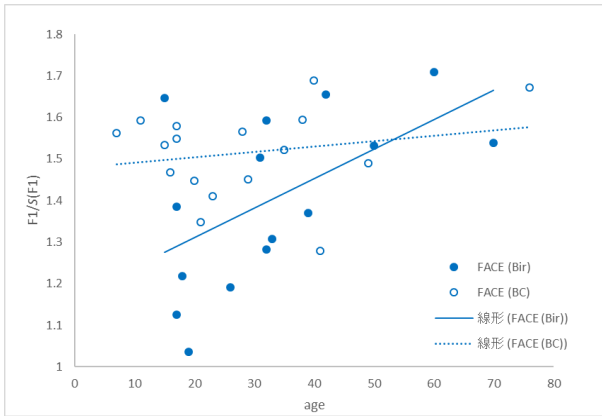


図1 FACEのF1と年齢の関係

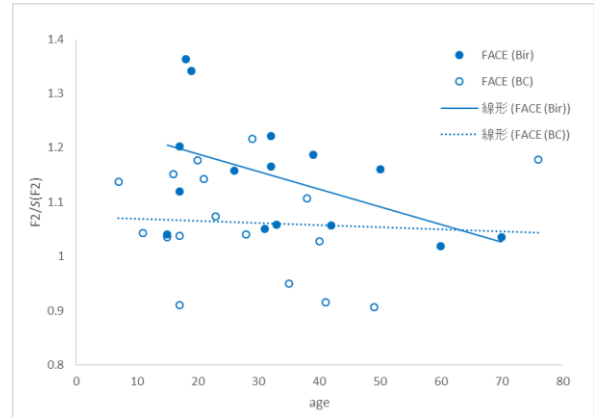


図2 FACEのF2と年齢の関係

図3はMOUTH母音のF1と年齢の関係を示したものである。バーミンガム方言では年齢が若くなるにつれてF1の数値が高くなっているが、ブラックカントリー方言では反対に低くなっていることがわかる。バーミンガム方言では年齢に応じて下げ (lowering) が、ブラックカントリー方言では反対に上げが生じていることがわかる。図4はMOUTH母音のF2と年齢の関係を示したものである。図3と同様に、それぞれの方言において年齢に応じた別々の変化が生じていることがわかる。バーミンガム方言では年齢が若いほどF2の数値が低いが、ブラックカントリー方言では反対に高くなっている。このことから、バーミンガム方言では奥舌化 (backing) が、ブラックカントリー方言では前舌化が生じていることがわかる。

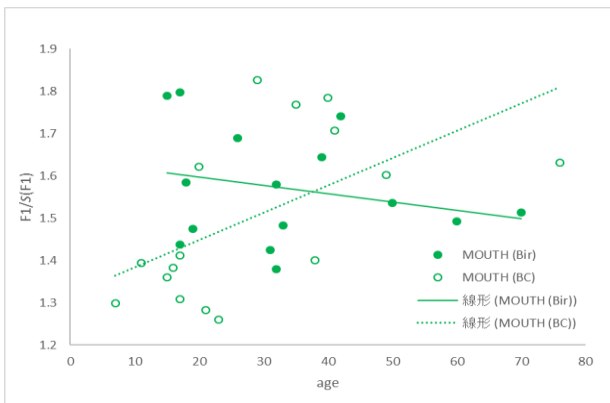


図3 MOUTHのF1と年齢の関係

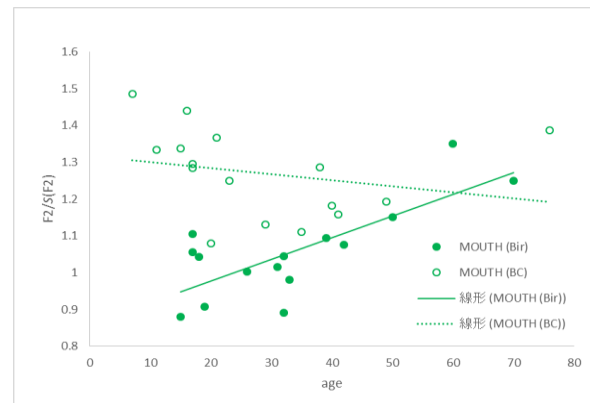


図4 MOUTHのF2と年齢の関係

図5はGOAT母音のF1と年齢の関係を示している。バーミンガム方言では、年齢が若くなるにつれてF1の数値が低くなっていることがわかる。つまり、上げが生じている。一方で、ブラックカントリー方言では、年齢に応じた大きな変化は見られない。図6はGOAT母音のF2と年齢の関係を示している。両方の方言で若干奥舌化の傾向が見られるものの、それほど大きな変化は生じていない。

今回の調査でバーミンガム方言にみられた変化は、いずれもイングランド南部方言の発音に近づく変化である。人口が多く移民も多いバーミンガムにおいて、若者の発音から地域方言の特徴が徐々に失われてきているようである。一方で、ブラックカントリー方言では年齢に応じた変化が比較的少なく、発音上保守的であることがわかる。また、唯一変化が見られたMOUTH母音については、バーミンガム方言と反対方向の変化が生じている。これには、ブラックカントリー方言話者のアイデンティティーが大きく影響していると思われる。調査者の印象では、ブラックカントリー方言話者は自身の方言に強い誇りを持っている傾向がある。方言話者としてのアイデンティティーが、方言音声の保存、さらには強調を促していると考え

られる。

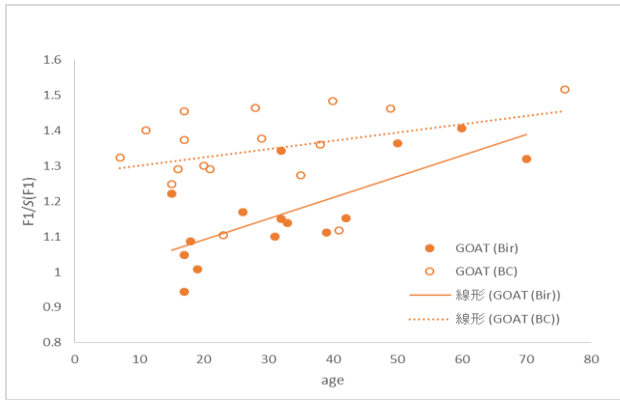


図5 GOATのF1と年齢の関係

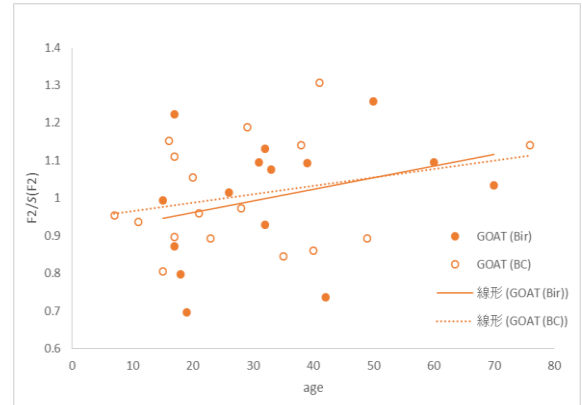


図6 GOATのF2と年齢の関係

助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合はURLを記載すること。）

発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)
勝田 浩令	バーミンガム方言とブラックカン トリー方言の二重母音の比較	日本英語音声学会, 第22回 中部支部大会 (愛知学院大 学, 栄サテライトキャンパ ス)	2015年2月28日

(管理番号:)